野村生涯教育だより

No. 431

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

（公財）野村生涯教育センターの
シンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観＝Nature」の
頭文字を表している。

もくじ

● 支部活動を通して自己教育の課題　静岡支部
● 幼児教育部点描
● パレスチナ支部からの便り　五月ガザ地区では
● 訃報　イエドラ・チナ・シマハドリ教授

支部活動を通して
自己教育の課題　静岡支部

静岡支部は、当センター静岡研修会館を活動拠点として五〇〇名を超える会員が学んでいる。

五年前、支部内の組織編成が大きく変わるにあたり、長年のスタッフ同士の不調和が浮き彫りになった。その後三年間、金子由美子理事長は、毎月同支部を訪れ、正副責任者会議に出席した。新たに責任者になった鈴木愛子さんは、当時、支部の中で本音で話し合うことが難しいと感じていた。そのことを理事長に伝えると「思っていることをすべて出していいのですよ」と言われ、鈴木さん自身が、理事長が来る度に本音で話し、受け入れてもらった実感を持った。すると副責任者たち自身も徐々にありのままの気持ちを出し始めた。理事長はその気持ちを受け止めた上で、一人ひとりに指導した。相手を理解し、自分を理解してもらうことがどんなに安心感に繋がるかを実感、それ以後、スタッフ同士の関係が大きく変化していった。

鈴木さんは自分の本音を出せるようになったことで気持ちが楽になり、夫にも理事長からの指導や自分の気持ちを話せるようになった。そうしたなかで夫婦間にも安心感が生まれ、生涯夫に添い遂げたいと思えるまでに夫婦の関係が変化した。

昨年一月下旬から新型コロナウイルスの感染者が増えはじめ、会館を預かる鈴木さんは、感染者が出ないようにと緊張感のなかで毎日を過ごしていた。

理事長から「一人で考え込むのではなく、自分はどう考えるのか、支部としてどう考えるのか繋げてください」と助言を受け、日々の感染状況、地域の状況を踏まえ、不安なことを相談しながら活動を縮小し、運営を行ってきた。また「メンバー一人ひとりの気持ちや、ご家族の考えをきめ細かく聞くように」との助言を受け、鈴木さんは副責任者と地区担当者にそのことを話し、それぞれが支部メンバーと関わりを持った。詳しく聞いていくと、家庭でのメンバーの実態が明らかになり、そのなかでも人生の仕上げの時期とされる老年期を過ごしている高年部メンバーの夫への意識が薄いことがとても気になった。自分の意識の変化が、夫との関係や足もとの環境に繋がっていることを実感していた鈴木さんは、その感謝から高年部メンバーにも改めてこれからの人生を夫婦で共にの意識で、と願うようになった。

昨年四月に緊急事態宣言が発出され、一時的に会館が閉館となり、再開後も高年部メンバーは会館へ通う機会が減り自宅で過ごすことが多くなった。その間、高年部担当者たちはメンバーに電話で連絡を取り合っていた。鈴木さんは、高年部担当者たちがメンバーと関わるなかで、相手を変えようと教えるばかりで、その条件を通して自分自身を見つめるという自己教育をしていないと感じていた。また度々「ご主人と向き合う努力をしてください」と投げかけていたが、伝わらないと思っていた。

高年部の担当は、長い間OさんとMさんの二人だったが、昨年度からNさんが筆頭担当として加わり三人となった。Nさんは三人の中で一番年齢が若く、長年筆頭だったOさんに威圧感を感じ、話し合いをしても強く言われると自分の意見や気持ちを言えずにいた。

十月初旬、Oさんが会館でメンバーと話をしていると、急にそのメンバーの体調が悪くなってしまった。鈴木さんは理事長にそのことを繋げ、また、日頃担当者たちが教えるばかりで人に与える影響を自分に見ていないことを話すと、理事長から「会館を預かる責任者としての影響力の大きさを、鈴木さんも先日実感したのではありませんか」と投げかけられた。鈴木さんは会館責任者として自身の予定を常に本部に伝えているが、ある日、閉館十五分前に会館を出なければ間に合わない急用ができ、その位ならと伝えなかったことがあった。しかし、その日に起きた問題を繋げた

ことから、閉館前に帰ることが理事長の知るところとなり「たかが十五分、されど十五分なのよ。責任者の十五分の影響は大きいのですよ」と指導を受けたことと重なり、ハッとした。

後日、そのメンバーはOさんと話し合うなかで「長い間Oさんのことが怖くて何も言えなかった」と吐露した。そのことをOさんが自分自身の課題として捉え、体調不良をおこさせるほど人に影響を与えていたのかと驚きになり、初めて自分に焦点が当たった。そして同じことを夫にもしてきたのではないかと自分を省みた。また、Nさんは以前地区担当を一緒にしていたメンバーから「Nさんは地区を仕切っていて弁が立つので、何も言えなかった」と言われたことを思い出し、Oさんに感じていた威圧感は自分の姿だと実感した。

その後高年部担当者たちは、メンバーに見えるものを自己教育の課題にしている。今まではセンターの行事があるからと一人で決めて出かけていたが、夫に相談するようになり、アドバイスをもらえるようになったという。夫との会話が増えたことで、夫から指摘されることも多くなり、責任者に毎日助言を求めるようにもなった。

さまざまな条件を通し、多くの関わりをもらうなかで責任者の意識が変わり、その意識の変革が高年部担当者に影響を与え、担当者も相手に見えるものを自分の課題にすることで、足もとの夫婦の関係が変化している。野村生涯教育の軸となる、社会・人生に触れ合う事象や人間関係の問題を自己の課題とし、相互教育を図っている。

幼児教育部点描

東京と近県在住の幼児教育部のメンバーは、これまで毎日子どもと手をつないで本部研修会館に通っていたが、現在は主にそれぞれ家庭生活の場で、子どもたちのこと、夫婦の関係などを課題にして、電話、メール、そしてオンラインミーティングを開き、コロナ禍での活動を続けている。

六月に入り、緊急事態宣言が長引くなか、毎年行っている朝顔の種まきの時期について話し合った。

幼児教育部の朝顔の種やチューリップの球根は、創設者から「種から芽が出て、茎が伸び、葉が出て、花が咲く、いのちの不思議さを子どもたちに実感してもらいたい」と、植物を親子で育てる意味を教えられた先輩たちから代々受け渡されてきた。母親たちは二十日に宣言解除が予定されていたことから、解除後に本部に出、皆で一緒にまきたいと考えていたが、理事から「植物を育てることは子育てと同じ。朝顔の種まきに適した気温はもうだいぶ過ぎているのよね。自分の子どもがお腹空いたと言ったら、来週まで待ってね、って言うかしら？　なんとしても、食べさせる算段をしない？」と投げかけを受けた。母親たちは「本当にそうだ」と思い、種まきは本部でなくとも、それぞれが自宅で植え、育てられると発想を転換できた。

昨年とれた種は本部に保管していたため、本部事務局に出ている先輩にお願いし、副責任者で園芸担当のMさんに郵送してもらった。Mさんが、同じ園芸担当のOさんと電話やLINEで連絡を取り合いながら種を分ける作業をしていると、幼児部修了生で、今年中学生になった長女が「初めての試験で、勉強の仕方がわからず、コロナ禍で仲間と一緒にすることもできない。今日は宿題もたくさんある。夜はピアノのレッスンなのにぜんぜん練習できていない」と言い出した。Mさんは種を分ける手を止め、娘の気持ちを聞くと「全部嫌だ」と泣き出した。いつもはこうなると受け止められなくなるMさんだが、今回は「そうだったんだ」と娘の気持ちを受け止められた。すると長女は落ちついた。Mさんは作業に戻り、急いで種を送り、娘は覚悟を決めた様子でレッスンに出かけていった。その後、

Mさんは種の数を間違えて送ってしまったことに気づいた。責任者のJさんに伝えると「種を分けるとき、どのような気持ちでいた?」と投げかけられ、ふり返ってみると、初めての作業で「間違えてはいけない」と緊張し、また他にも急ぎでやらなければならないことがあり「大変」と思っていたことが見えてきた。こんなに気持ちが詰まっていたのかと自分の気持ちに気づくことができ、驚いた。同時的にレッスンから帰った娘も、ピアノの先生に、家で練習ができなかったという自分の気持ちを伝えることができ、直ぐに学校の宿題も始め、翌朝、早起きしても終わらなかったが、それも先生に話すと言って家を出た。以前のMさんだったら、宿題が終わらないと「何やっているの!」と言っていたが、仲間に気持ちを聞いてもらったことで、Mさん自身が自分に思いが詰まっていると気づき、それが安心感に繋がり、娘も頑張っているのだと思えた。

理事補佐に繋げると「今までと違う環境でやっているのだから、思い通り、予定通りに行かないこともあるはず。親の側がその時に湧き出る気持ちと向き合い、自分を知ろうとすることを課題にしていきましょう」と助言を受けた。また、そのことを聞いた理事から「役を通して葛藤していたから、娘の気持ちを受け止めることができたと思いますよ」と言われ、今までは「文句ばっかり言って!」と責めていたと思い、親子で成長させてもらえることが感謝になった。

改めて種を送り、六月二十日に連絡を取り合いながら、それぞれが自宅で種をまき、その後も朝顔の様子を共有しながら成長を見守っている。六ヶ月の長女と初めて種まきをしたYさんは、土にコバエのような虫が集まっていることが気になり、責任者と園芸担当に相談すると「土を買ったところに聞いてみてはどう?」とアドバイスをもらった。ちょうど双葉が出てきたところで早く駆除しなくてはと焦り、急いで問い合わせると、丁寧に対策を教えてくれた。そのなかで「虫がいることで植物にとってよいこともある」と言われ、金子理事長が年頭言で新型コロナウイルスについて触れた際に、近年の研究によって哺乳類の胎児をウイルスが守っていることがわかってきたと話されていたことを思い出した。理事長が「私たちは自然界の営みをあまりにも知らない、ということを改めて思います。だとしたら私たち人間は、無自覚に生態系のサイクルを狂わせている方向に加担している、ということも言えるでしょう」とおっしゃっていたことから、Yさんは自分にとって不都合と見るとすぐに排除したくなる意識がどれほど自分中心な考えなのか、そうした意識が生態系を壊すことに繋がっているのだと思えた。

また、Jさんが自粛期間、三人の娘と共に自宅でさまざまな花や植物を育てるなかで、それぞれに特徴や育て方があり自分の知らないことがたくさんあったことを思い、自分の意識を厳しく見つめていきたいと思ったことを皆に話した。それを聞いた四人の子を持つHさんは、皆は芽が出てきているのにH家の朝顔はまだ出てこないことに捉われていた。夫に話すと「次女に対して、個性を受け入れられず、人と比較し心配ばかりしているところが、朝顔のことと一緒ではないか」と言われたところだった。Jさんの言葉から、改めて成長のリズムはそれぞれ違うのだと思い、親としての在り方を課題にしたいと思った。

また他のメンバーもそれぞれが自分の意識を見つめるきっかけとなった。

コロナ禍という条件を通して、家庭の中で自分の見方や価値観に捉われがちになりながらも、意識を見つめ、同じ場にはいなくとも主体的に自分の気持ちを出し合い、課題を話し合える関係を築くなかで、どの場においても自己を知ることの大事さを母親たちは実感している。

パレスチナ支部からの便り
五月ガザ地区では

今年五月、東エルサレムで起きたパレスチナ人とイスラエル警察との衝突に端を発した武力衝突が連日大きく報道される中、金子理事長は、カイロ在住のパレスチナ支部責任者アマル・アブゥ・エマラ女史にガザの人々の無事を祈る書簡を二度送った。それに応えて、女史からはガザの状況を伝えるメールが送られてきた。六月には、昨年ガザで制作された女史の半生をたどったドキュメンタリー映像が届いた。難民として生きざるを得なかった女史が、創設者と出会い、野村生涯教育の人間観に触れ、自己の尊厳に目覚め、文化・伝統の復活を通してパレスチナ人のアイデンティティを守ることへの深い思いが描かれていた。

同時に、激しい空爆を受け破壊と恐怖で傷ついた子どもたちを対象とした精神衛生のワークショップで笑顔を見せる子どもたちの写真も送られてきた。五月に届いた二通のメールから一部をお伝えする。

「金子理事長、そして皆さまのお気持ちと祈りをありがたく存じます。

ベッドで眠りについている子どもたちを標的にするイスラエルの攻撃は恥ずべきことです。昨夜一時には何の警告もなく攻撃が始まり、八人の子どもたちとその母親が眠る家が崩れ落ちました。二ヶ月の乳児だけが助かり、その子は孤児になりました。ジャバリアにいる支部のガザチームは空爆で地域一帯が破壊されたため、今は学校で寝泊まりしています。学校が標的にならないことを祈っています。ガザの人々は、今、赤新月社や人道支援活動組織からの援助を待っているところです。

娘のライラは、エジプトに搬送されてくる負傷者の精神的支援をするボランティアに応募しました。私と夫のアリはガザのことを思うと、夜も昼も眠れません。ガザの自宅も攻撃を受け、崩れ落ちた幾棟かの住居ビルは私たちの隣人の住いです。

この六日間、イスラエル人の中にも自宅で安心して過ごせずにいる人がいることでしょう。すべての人々が安心して過ごせるべきです。常に占領下に暮らし、その思いを知る私たちが、公平な解決へ、そして暴力の応酬を終わらせる道へと導けるように願います。人間の尊厳は平等であるということの下での調和と平和を私たちは常に願っています。こうして心の中に在る思いを表現する機会があること、そしてあなたの人間に対する尊厳と誠意に感謝します」

ワークショップでの子どもたち

「多くの人々が私たちパレスチナ人の存在を否定し、故郷への帰還権を否定している時に、こうしてセンターの皆さまが私たちを理解し、支援してくださることがどれ程大きいか。

今回の空爆で破壊された十七の病院には、唯一の新型コロナ検査施設も含まれていました。多くの学校が被害を受け、およそ六十万人の生徒たちは通学ができません。上水道設備も爆撃され、通りの下水が飲料水と混ざってしまっています。七万二千人が家を失いました。特に子どもたちの精神的ダメージは大きく、ガザの子どもたちはこの荒廃と恐怖に耐えねばなりません。隠れる場所も、逃げ場もない状況は決して癒えることのない傷を残します。

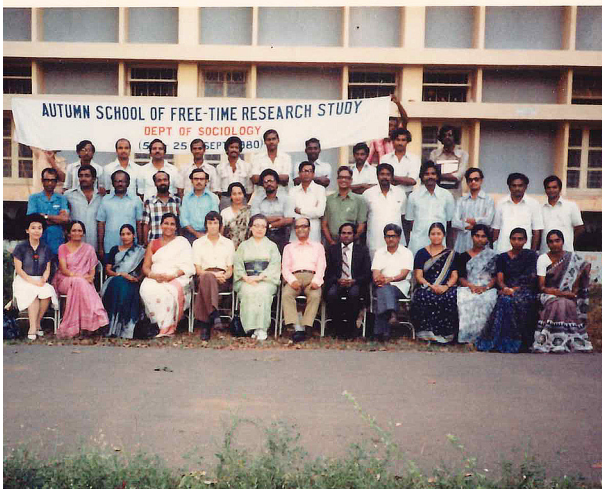
私たちはガザの人々のためにできる努力を続けます。子どもたちは私たちの未来ですから、この試練に耐えようと思います。今、ガザチームに次世代のリーダーを養成するための計画を練っています」

訃　報
イエドラ・チナ・シマハドリ教授

二〇二一年五月二十二日、社会学・犯罪学教授であり、当センターインド支部責任者の夫君イエドラ・チナ・シマハドリ教授が新型コロナウイルス後遺症の肺炎により逝去された。享年八十歳。

インドの州立総合大学は学部生と院生、教授、大学職員の家族たちが広大な敷地に生活する共同体のような様相を持つ。教授はそうした州立大学の四校で学長を歴任した。学術的な大学改革に留まらず、広大な大学の管理運営体制の改革も精力的に進めてきた。時には、バリケードを張り、ストライキを起こし大学改革を訴える学生たちの中にも、どんどん入っていき、対話を通じた相互理解を図り、しかし、授業放棄することには断固反対した。教授はこうした学内に信頼関係を築きあげる対話を通して大学改革を進めた。

「学長の中の学長」と呼ばれた教授が創設者 野村佳子初代理事長と出会ったのは、一九七九年に遡る。当時アンドラ州立大学社会学部長であったシマハドリ教授は、ベルギーでの余暇文化に関する第三回ヴァン・クレ世界会議において、創設者の講演を聞き「この思想はインドという第三世界へ、その人々のために、紹介される必要がある」として、翌年、全インドから教育心理学、社会学等の教授たちを対象に、同大学余暇文化研究秋季講座を開き、余暇社会学学会の事務局長でカナダのケベック大学ジル・プロノボ教授と創設者を特別講義、記念講演者として招聘した。



余暇文化研究秋季講座

講座最終段階で、午前中の講義を終え、午後参加者との討議を予定していた創設者と主だった参加者に、アパロウ学長から昼食会へのご招待が届いた。秋季講座の成功と今後について話が弾み、午後の質疑の時間は短縮され、創設者には残念な思いが残った。翌日帰国する創設者は、明日、出発するまでの間に教育学部の学生たちにも話を、と依頼した教授に、今晩十一時に会いましょうと約束し、別れた。

帰国の準備を終え宿舎のロビーで再会したシマハドリ教授に、創設者は昼食会が長引き参加者との討議の時間が削られたことがどれだけ残念だったかを話した。

教授はインドの慣習とも言える独特な時間感覚のことを話し、お詫びをされた。

創設者は「貴方はこれからのインドの開発を担う人なのだから申し上げますが、約束を守らないことは、単に時間の問題ではない。信義の問題です。それは大きな不信や人間無視にも繋がる。風土や気候が長い年月に培った慣習や民族性、植民地時代の弊害の後遺症などが現代インドにあるならば、その人間性復活を急がねばならないでしょう」と語った。やおら立ち上がった教授は「今のお言葉で、私の頭の中の電球全部に明かりがつけられたようだ」と興奮気味に語り、創設者に感謝を述べ、お供に連れていた三人の学生と共にその場

を辞した。翌朝、迎えに来た教授は、昨夜一晩かけて学生と今日の参加者全員の家を周り、明日は遅刻をしないようにと言ってまわったと創設者に報告をした。すでに会場は、学生だけでなく教授たちも参加し、溢れかえっていた。創設者は「一人ひとりの尊厳の復活による国の開発をこそ」と講演を結び、飛行場に向かった。

一九八二年、西ドイツ（当時）・ケルンでの第三回生涯教育国際フォーラムに参加した教授は、センターメンバーたちの会議運営の様子をつぶさに見て「その誠実さ、勤勉さ、野村生涯教育の哲学に対する熱意、目的の正しさ、また労働の分担、働くことの尊厳、そして何より日本的やり方に深く感動した」と述べている。

フォーラム後「インドは文盲率が高いうえ、教育を受けた者さえこの国の教育について無関心です。彼らのためにも生涯教育とあなたの思想は非常に重要です。大学から一年の休暇を取り、野村センターに留学したい」と書かれた書簡が創設者宛てに届いた。

そして、一九八三年四月、教授はセンターの第一号留学生として来日した。留学生活の一切は国際部と青年部の若いメンバーが引き受け、午前は日本語学校、午後はセンターの学習活動に積極的に参加する日々を過ごした。本部で毎日行われるメンバー同士の討議に加わり、全国講座はじめ各定例講座で創設者の講義を聴き、学びを深めた。ある時「日本のような先進国では能力主義は人間疎外などのマイナス面を持つかもしれないが、カースト制の残滓を持つインド社会ではその人の能力や行動が認められると社会的平等も認められる。ゆえにインド社会には能力主義こそ必要である、その前提にたっての人間開発はどうしたらよいか」と質問。それに対し創設者は「国によって社会的背景は違うが、能力とは本来人間が持つ可能性であり、能力を含めての本質的な人間の価値、存在そのものの価値へ焦点を当てない限り、本当の意味の平等に目覚めた人間社会はあり得ないのではないか」と答えた。こうした話し合いの積み重ねを経て、教授は「インドの開発や平等のために今までは扇動的な方法で社会の矛盾と取り組んできたが、そのようなアプローチは決して解決に繋がらないこと、社会改革のためにはミセスノムラの説く自己教育こそが第一だとわかった」と語った。翌年六月には日本滞在中に結婚した当時青年部メンバーだった直子夫人と共に帰国した。

創設者との懇談

シマハドリ教授は、その後も長年にわたり下層階級の人々の地位向上に力を尽くした。その間、当センターの全国大会、国際フォーラムに直子夫人と共に毎回のように参加し、さらに廃校寸前になっていた貧しい地域に住む児童のためのアンベドカール博士記念学校をインド支部活動の一環として直子夫人と共に復活させた。当初五、六名だった生徒が現在は幼稚園生から十年生まで約五百名が通う学校に成長している。

その飾らない、謙虚なお人柄と自国を思い、自己変革を通して社会改革を掲げた使命感で貫かれた人生は、直子夫人とのまさに二人三脚の人生でもあった。

ここに心からのご冥福をお祈り申し上げます。